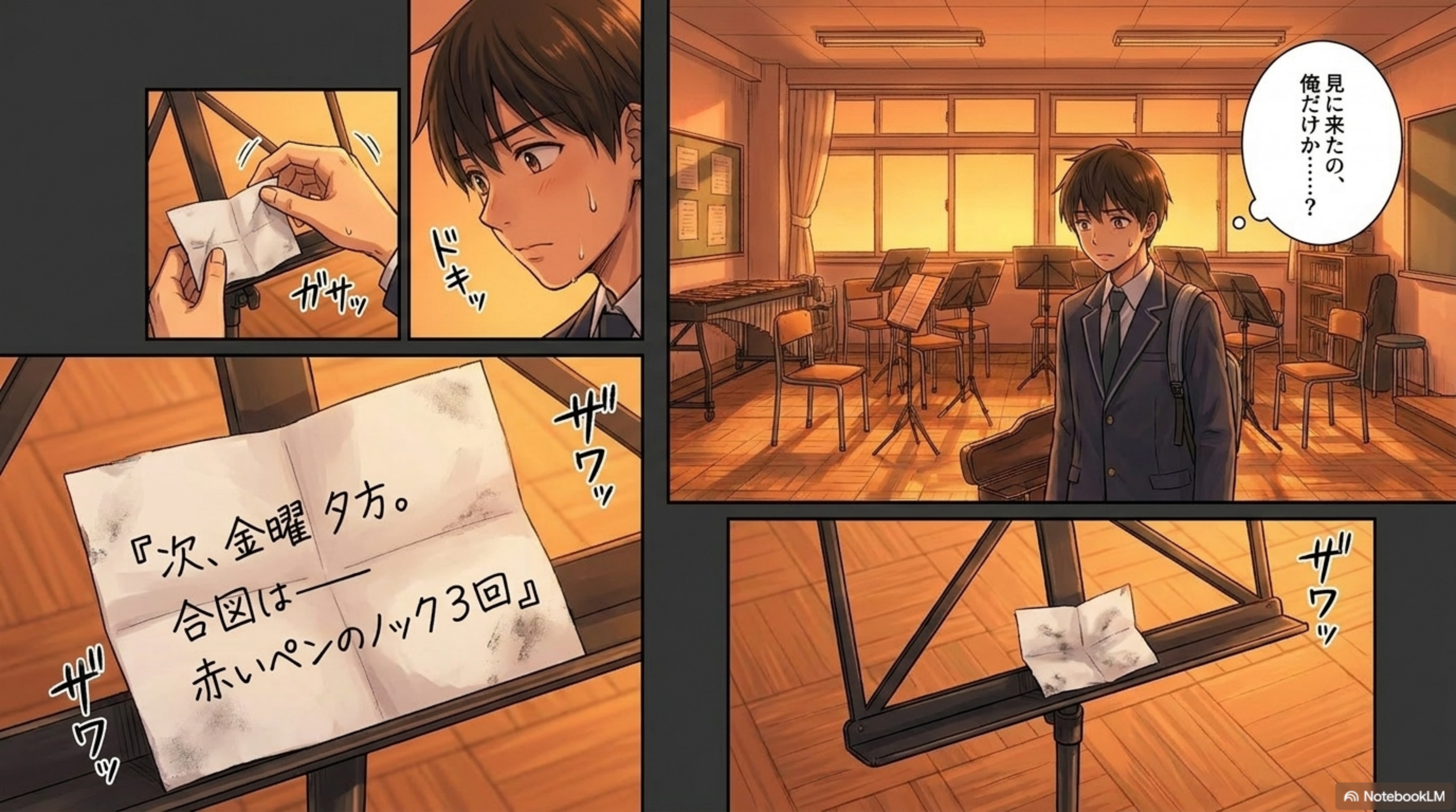
NotebookLM

（金曜日の夕方。
胸の奥が妙に
落ち着かない。）
なれは
オーラちて…
（コンクール練習の姿を
見ようと思っただけなうと
思っただけなのに――）
ギィィ……
（音は、ない。）

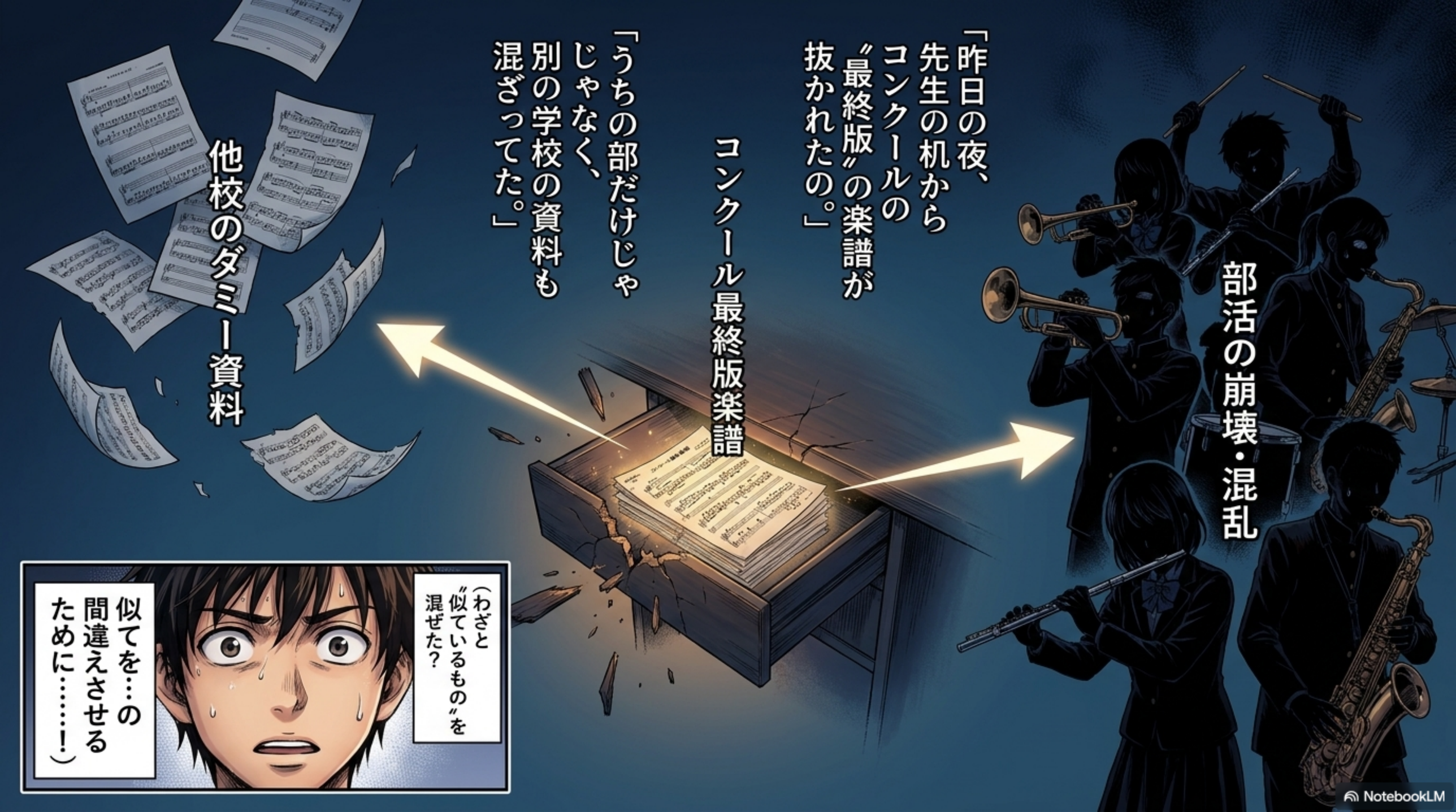
NotebookLM


見に来たの、
俺だけか……？
ザワッ
ドキッ
ガサッ
ザワッ
『次、金曜 夕方。
合図は――
赤いペンのノック3回』
ザワッ
ザワッ

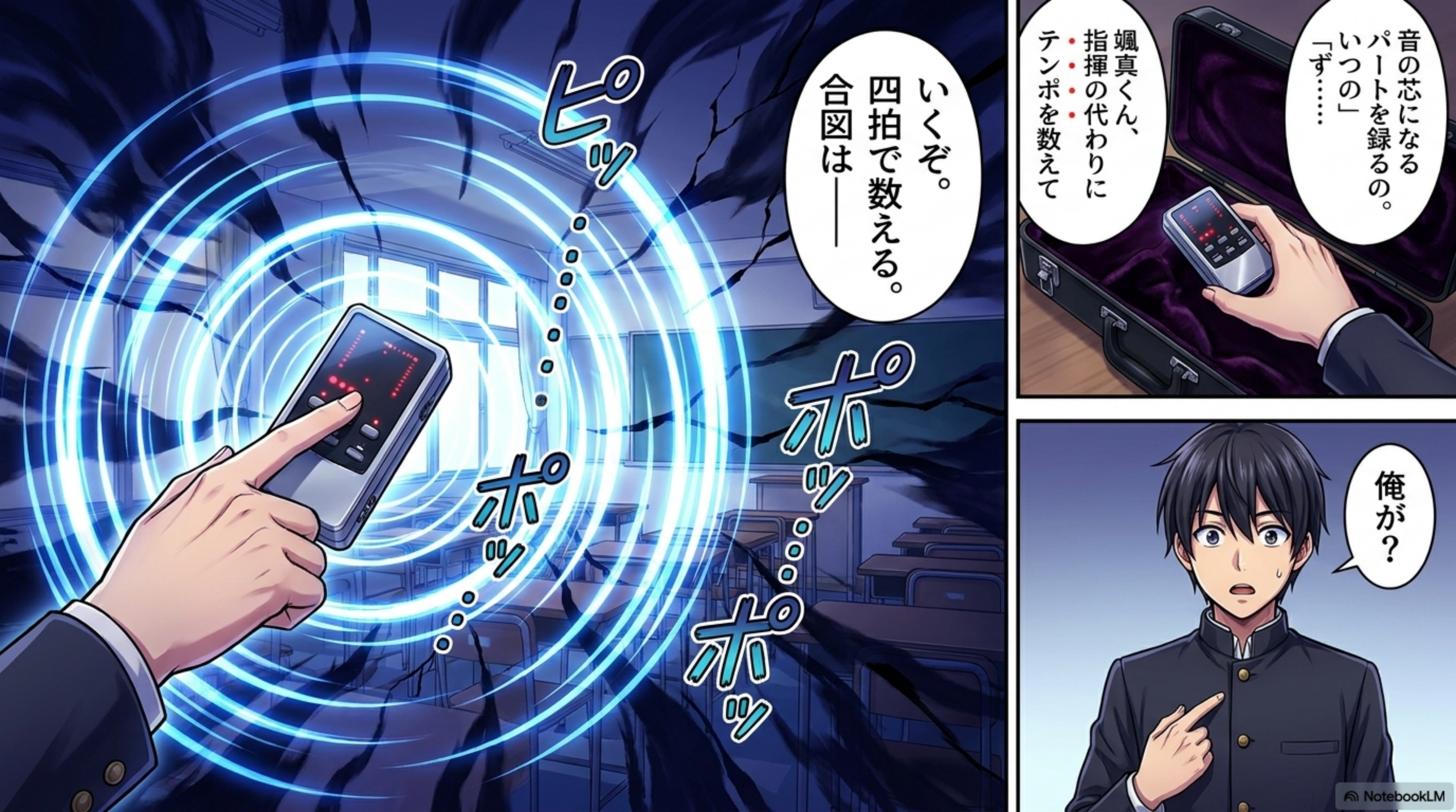
キラッ
（……待ち合わせ、
してたのか？
人だけがいない。
まるで、音だけが引っこ
抜かれたみたいに。）
ゴン、
コン、ゴン……
な〜こ
トった
（〝ノック3回〟）
NotebookLM

タッ、タッ、タッ……ピタッ。
コン、コン、コンッ
「……遅れた。颯真くん、来てた？」
（〝同じ回数〟だ。）

「知ってたのか……？俺の名前」
「先生から、〝来るかもしれない〟って。合図が揃うまで、動いちゃダメって言われてたの」
「私、一年の結城。ユーフォ担当。……怖がらせてごめん。でも、起きたことを聞いてほしい」
カチャッ
NotebookLM


「昨日の夜、
先生の机から
コンクールの
〝最終版〟の楽譜が
抜かれたの。」
「うちの部だけじゃ
じゃなく、
別の学校の資料も
混ざってた。」
コンクール最終版楽譜
他校のダミー資料
部活の崩壊・混乱
（わざと
〝似ているもの〟を
混ぜた？
似てを…の
間違えさせる
ために……！）
NotebookLM

「誰かが〝嘘の楽譜〟を置いてるかもしれない。私たちが次に何をするべきか決められないと、相手の思い通りになる」
（犯人探しじゃない。〝間違った手順を止める〟ところに希望があるんだ。）
「じゃあ、今できることは？」
「合奏の入り、要所だけでも揃える。犯人が〝演奏が崩れる〟と予想していても、崩れない状態にする！」
NotebookLM


音の芯になるパートを録るの。いつの」
「ず……
颯真くん、指揮の代わりにテンポを数えて
俺が？
いくぞ。四拍で数える。合図は――
ピッ
ポッ
ポッ
ポッ

「ワン、ツー、
スリー、フォー…！」
（遅れが揃う瞬間、
音が立ち上がってくる。
地味で、確かで、
安心する音。）
（恐怖の正体は、
〝誰かが仕組んだズレ〟
だったんだ。）
NotebookLM

「二人とも、いたのか……。結城、ありがとう。颯真、君も」
「盗まれたのは確かだ。だが、ここにあるのは〝最後の確認用〟。本番で致命傷になるのは、こなるのは、音の芯なんだ――
dummy score
「相手は〝部が崩れる〟と思って仕掛けた。だが、君たちの音が揃っていれば、
だが、君たちの音がが揃っていれば、勝負は変わる」
NotebookLM

「先生、俺たち、やれちゃいます」
「先生はるんだろ」
「誰がやったとしても、私たちはちゃんと前に進む」
（ワン、ツー、スリー、フォー。明日へ続くリズムの中で、部は静かに強くなっていく。）
（音のない時間は、いつの間にか、音が生まれる時間になっていた。）
おわり
NotebookLM